

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 29 年度
氏名	土田 彩	指導教員 (主査)	小池 眞規子

論文題目	シルバー人材センター会員の実態および生きがい感の関連要因の検討
------	---------------------------------

### 本文概要

**問題意識** 日本の高齢化は進行し、今世紀半ばには老年人口の比率が 40%に達すると予想されている。ここで、健康長寿を目指すうえで豊かな老年期とは何かを探る必要があると考えられる。現在定年退職後の人が社会で活躍し続ける機会を得られる場としてシルバー人材センターがある。シルバー人材センターとは、労使間の雇用関係を前提とした高齢者就労ではなく、地域の高齢者が互助と共働のための就労活動を展開するために作られた公益社団法人である。シルバー人材センターの活動は世界に類のない日本独自の事業であり「生きがい就業」と言われている。神谷 (1966) によると生きがいを感じているときの精神状態を“生きがい感”と名付けている。高齢期に起きる変化や問題の 1 つとして社会的役割の喪失がよく挙げられる (椋, 2011)。しかし、シルバー人材センターの会員は労働によって他者や社会の役に立つと感じることでそれが生きがいに繋がっていることが考えられる。

**研究目的** 本研究では、シルバー人材センターや登録者の特徴も明らかにしたうえで、どのような特徴を持った人がシルバー人材センターで活動をすることで生きがい感が得られるかを検討する。またさらに、生きがい感の要素の中でも、どのような生きがい感を持つ人の精神的健康、自尊感情が高くなるかを明らかにすることを目的とする。

**研究方法** 東京・京都・北海道の全 14 カ所のシルバー人材センター事業所で質問紙の配布を依頼した。シルバー人材センター会員登録者 659 名に個別自己記入式質問紙調査を実施し、回収数 522 名 (回収率 79.2%) の中から未記入や回答に不備のない 496 名の回答を分析の対象とした。使用尺度は、General Health Questionnaire (GHQ)-12 項目 (Goldberg, 1972)、自尊感情尺度 (Rosenberg, 1965)、高齢者の生きがい感スケール (K-I 式) (近藤・鎌田, 2003) であった。分析方法は、会員の属性による生きがい感の高低を検討するために分散分析を行った。生きがい感の特徴を明らかにするために高齢者の生きがい感スケールを因子分析・クラスタ分析を行った。さらにクラスタ分析で得られた 3 群間で精神的健康、自尊感情を比較検討した。

**研究結果** 会員の属性の違いによって、生きがい感の高さが異なるか検討を行ったところ「最終学歴」「暮らし向き」「会員期間」「シルバー人材センター満足度」において有意な差がみられた。他には、生きがい感が高い群ほど、精神的健康、自尊感情も有意に高いという結果が得られた。また、生きがい感の特徴を捉えるために生きがい感尺度の因子ごとにクラスタ分析を行ったところ、全ての因子の高群、中群、低群の 3 つのクラスタに分かれたため、本研究で使用した尺度においては生きがい感の新たな特徴を見出すことは出来なかった。

**考察** 本研究では、シルバー人材センター会員の特徴を明らかにすることができた。また、シルバー人材センター会員の生きがい感が全体的に高いことが明らかになるとともに、そのなかでも生きがい感低群が一定数いることが分かった。生きがい感を高めるためには、今後、シルバー人材センター受注する仕事と会員が希望する仕事がマッチすることで会員の自己実現欲求が満たされ、生きがい感が高まる可能性が考えられる。また、仕事において、会員が自分がいなければならぬと思える仕事を提供するなど役割意識を高めることが、会員の生きがい感を高めることにつながる可能性があると考えられる。

**引用文献** 熊野 道子 (2006). 生きがいとその類似概念の構造 健康心理学研究, 19 (1), 56-66.